“自分らしさ”を生かした未来へ――

未来館 News

＊特集
未来館フェスティバル「大参画祭」
「涙は女の武器じゃない」
～どうなる?日本
時代の変革をリードする女性たち～

福島県男女共生センター広報誌　※表紙は紙媒体のものとは異なります

2006.12
No.24

未来館フェスティバル「大参画祭」

「涙は女の武器じゃない」

～どうなる?日本　時代の変革をリードする女性たち～

平成18年9月2日に未来館フェスティバルのシンボルイベントとして、「涙は女の武器じゃない～どうなる?日本　時代の変革をリードする女性たち～」を開催しました。第1部では元外務大臣で、現参議院議員の川口より子氏による基調講演を、第2部では川口より子氏と下村満子館長との対談を行いました。その内容をまとめてご紹介いたします。

第1部　基調講演

皆さん、こんにちは。館長の下村満子さんとは、ずっと長いだけでなく、大変に親しく、いろいろ啓発をされながらお付き合いをさせていただいていますが、ようやくこの男女共生センターに伺うことができたことをうれしく思います。

〔女性のさまざまな生き方〕

下村さんとは、ニューヨークのある大学の寮でお会いしたのが出会いで、それ以来の付き合いになるのですが、下村さんは、アメリカの大学から日本へ帰り、東京オリンピックで通訳のアルバイトをなさって、その後、朝日新聞社にアルバイトで入られ、能力が認められていろいろな経験を経ながら、朝日ジャーナルの最後の編集長もなさって、ということで、才ある人は認められるということの本当に一番いい例じゃないかと思います。その後、事業家に転身をして、現在は女性の医学のことをやっていらっしゃるわけです。

私は、女性の特権というのは選択肢の幅が広いということだと思うのです。そういう意味で、下村さんは、結婚をして家庭を持つというところに最初の一歩を据えて、それからいろいろな機会を活用し能力を発揮されて、今日に至っています。

私の場合は、どちらかと言えば、私は絶対に仕事をするというふうに思いを定めて、「だけど結婚もしたい。」と欲張りにいろいろ考えていました。それをどうやって実現するかが今若い女性の方にはいろいろ問題でもあろうかと思います。「涙は女の武器じゃない」という本を書いたのは、仕事をして結婚して子どもが生まれて仕事をし続けるという私のとった生き方は、様々な生き方、たくさんある選択肢のうちのひとつですが、その自分の経験も一つの参考になるかなという思いからです。

〔女性を取り巻く労働の状況〕

私は、今の日本は女性がもっと何らかの形で社会に関わって仕事をしていかなければいけない時代になってしまったと思っています。理由は少子化です。合計特殊出生率が、1.29から1.25にまた下がりました。労働力を考えたときに、今、日本で働いている人は約6千万人強ですが、それがどんどん減っていく。推計では2030年には、労働力が1千万人くらい不足するだろうと言われています。ではどうすればいいか?

川口　より子氏（かわぐち　よりこ）

1965年通商産業省入省、在米公使、通産省大臣官房審議官などを経て、1993年サントリー（株）常務取締役に就任。その後環境大臣、外務大臣、内閣総理大臣特別補佐官を歴任し、現在は自由民主党政務調査会副会長、自由民主党女性に関する特別委員会委員長として活躍中。

外国人に入ってきてもらうということもありますが、まずはとりあえず、日本人の高齢者と女性にそこを担ってもらうということがなければ日本社会が活性化することはないと思います。多くの女性が今まで以上に仕事をする、あるいはボランティア活動で社会の中で生きていく、もっと社会に貢献をしていくということが必要になっていく、これが現実だと思います。

〔女性が社会に関わることの大切さ〕

私は、女性が仕事をしたり社会に関わったりすることは、違った発想を社会に持ち込むことであり、とても大事だと思っています。以前、スイスの大使と話をして、スイスには資源がほとんどないにもかかわらず豊かである理由を尋ねたところ、大使は「スイスは外から来た人を拒まないので、フランスやドイツ、周辺国からどんどん優秀な人が入ってきて、スイスの社会経済の発展のために貢献をしてくれている。」と答えました。それを聞いたとき、私はこれだと、「進歩は外から」だと思いました。

日本の場合、「外」というのは女性だと思います。今まで日本社会はどちらかと言えば男性中心の社会、それでうまくやってこられたわけですが、90年代に日本の経済が停滞していろいろな事がありました。それは、日本が前からのシステムを持ち続けてきていて新しい発想で物事を変えていくことをしなかったからです。それを変えていく一つの大きな力というのは、女性の経験であり女性の新しい発想だと思います。

これは、経済だけではなく、環境や人権の問題などにも言えることで、いろいろな分野に女性が新しい視点で発言をしていくということが大事だと思っています。ですから、女性が力を発揮しやすい場所をつくっていくというのが私の大きな仕事の一つだと思っています。

〔社会制度が持つ制約〕

女性が子育てを終えて仕事をしようと思ったときに、すぐに仕事が見つかるかというとそれはなかなか難しい。パートやアルバイトで働く、もちろん家事との両立の為にその方がいいと考える方の場合はそれでいいのですが、もっと働きたいと思っている人がなかなか働きにくく、また、賃金も低い現状があります。ですから、例えば若い女性が企業に就職したときに、一度辞めたらこの仕事をもうできなくなるかもしれないと思うから仕事を辞めない、結婚に踏み切れない、出産にも踏み切れないということに繋がってくるわけです。これは男性の問題でもあるのですが、ある段階で仕事を辞めてもちゃんとした仕事に就ける仕組みが大事だと思っています。また、短時間正社員制度をもっと充実しなければいけないと思います。

雇用保険や年金制度にも問題があります。例えば雇用保険の対象になるのは週20時間以上の労働が条件になります。それからよくいわれることですが、妻の給料が103万円までの場合には夫に配偶者控除がありますが、それを越えると配偶者控除がなくなり、130万円を超えると扶養の対象からはずれる、それが女性がある一定時間働くことの阻害になっています。これはもともと日本の制度が、父親が働いて、母親が家にいることで成り立ってきたわけですが、今はそうでなくなってきているわけですね。統計を見ると、今は夫婦両方が働いている世帯が夫のみ働いている世帯よりも、100万世帯多くなっています。しかし、必ずしも制度はそれについていってはいません。男の人の生涯の給料を100とすると女性の給料は65程度であり、この給料の差も変えていかないと女性が生き生きと外で働いて日本の発展に貢献するということにならないと思っています。

〔社会の中での役割分担意識〕

また、社会の中で役割分担という意識があると思います。この間、ファイナンシャルタイムズのイギリス人記者と話したのですが、彼は「日本、韓国、イタリア、スペインなど、伝統的な男性と女性の役割意識、つまり、父親は外で仕事をし母親は家にいる、そういうような意識が固定的にある社会では少子化が進んでいる。」と言っていました。そういった社会では、家事の負担が女性に偏り過ぎているということがあります。統計では日本の男性が家事育児に費やす時間は1日0.8時間ですが、スウェーデンでは3.7時間、アメリカでは2.6時間、ドイツでは3.5時間です。そして、男性が家事育児に多くの時間を費やしている国では、女性の方も家事育児に長い時間を費やしている。これは、今挙げた国では仕事と家庭のバランスがよくとれている、ということだと思います。一方、日本社会では、女性への負担の偏りと社会全体としての仕事と家庭のバランスの悪さがあり、それが少子化の一因であろうと思います。

〔少子化をくい止めるために〕

今、政府は少子化の流れを止めるために、育児手当の支給や保育園の充実、保育ママや病児の保育など、まだまだ十分ではないにしろ、いろいろ取り組んでいます。

ただ、育児手当にしても保育園にしても、それは子どもが生まれた人あるいは生まれようとしている人には意味があることですが、結婚や出産をためらっている人たちに、どれくらい結婚や出産に踏み切る有効な手段になるかと考えた場合、もっとやることがあるのではないかと思っています。

現に多くの人たちが仕事をしていて結婚しようかあるいは出産しようかというふうに迷っているわけで、どうしたら結婚・出産が「人生の一つの選択として楽しいこと」というふうに思ってもらえるか。国が制度的に何ができるかというとなかなか難しい。一つできるのは、先ほど申し上げたような短時間正社員のように仕事と家庭のバランスをもっと取り易くして家庭にもっと時間を使いながら仕事ができる、そういうような仕組みを導入するということだと思いますが、これは企業の態度に大きく関わっているところがあると思います。そのためには、我々

一人ひとりの国民がしっかりと企業を判断して見ていく。この企業はいい企業だ、この企業は仕事と子育てのバランスを考えている、というふうに厳しく企業を見ていく、あるいはそのための情報が広く発信されることが必要だと思います。そういったみんなの気持ちが一つになって、仕事をしながら子育てをしたいと思う人はそれができるように、あるいは仕事だけで子育てはしませんという人はそれが何ら社会的に後ろめたい思いをしないで実行できる、それぞれが自分の思うように生きていけるということが大事だと思います。

〔一番大事なのは若い人たちの気持ち〕

日本の女性は活力と能力があり、それが生かされるためには周囲の理解や手助けも必要で、国の制度も整備する必要がありますが、一番大事なのは若い人たちの気持ちだと思います。もっと日本の若者には自信を持って、前に向かって動いていってもらいたいというのが、私の思いです。制度的なことが問題であれば、それは今の私の立場で議論をし、整備していく努力もしていきたいと思っています。私が参議院議員になって外交と環境と女性の問題ということを3本柱にして仕事をしてきましたが、それぞれ私にとっては重要ですが、そのなかでも本籍地は女性の問題だと思っています。今後とも、若い人たちのために、つまり、日本の将来のためにできるだけがんばっていきたいと思っております。今日はありがとうございました。

第2部　対談

〔出会いはニューヨーク〕

下村　川口さんとニューヨークで最初に出会った時のことは、川口さんの著書「涙は女の武器じゃない」にも書いてありますが、二人ともニューヨーク大学の留学生で、寄宿舎の玄関で会いました。その時私は、紅色のチャイナドレスを着ていました。彼女は私を中国人だと思って英語で話しかけたの。私は彼女を、韓国人だと思ったので英語で応対しました。二人で話しているうちに変だなあと思って、私が「アー　ユー　ジャパニーズ?(あなた日本人?)」と聞いたのです。すると「イエス　アイ　アム(そうです。)」互いに「なあんだ(笑)」、ということで日本語で会話をし始めた、というのが二人の出会いでしたね。留学時、私は英語があまりできなくて、とにかく夜ぐらいはもう英語は話したくない、とノイローゼのようになっていました。それで、特別にお願いして寄宿舎では一人部屋をもらいました。彼女は高校時代から留学経験があるので英語が良くできて、そこは最初から川口さんと私の差ですね。ところが川口さんの本を良く読むと、私のその時の状況は川口さんが最初に高校生で留学したときと同じだったということがわかって、安心しました。

川口　そう。朝目が覚めた瞬間はぼーっとしているんですよね。次の瞬間英語が聞こえてくる、嗚呼、私はアメリカにいるんだ、と思って実はがっかりしたという経験が最初はありましたね。ほんとに英語もわからないし何もわからない。まわりで話が弾んでいても、自分だけ目の前にカーテンが降りて、耳のまわりにもカーテンが降りて。

下村　でも、あなたの本にも、3か月経ったら不思議なことに単語がとぎれて聞こえるようになった、と書いてありましたよね。私も全くそうでした。不思議ですね。

川口　そう、不思議ですよね。外国語は徐々に続いて解るようになっていくのではなくて、ある段階でふわっと一つ上に上がったな、理解力が進んだなと思う時があるのですよ。

〔歩んできた時代ー日本の戦後の女性史〕

下村　実は、私も川口さん同様、少女時代から、職業を持ち結婚をしてこの二つを両立させることが目標でした。

当時は、仕事と家庭を両立させるということをちらっとでも言うと、まわりの大人たちに「そんなことを言ったらお嫁のもらい手がなくなる」と、きつく注意され、タブーになっていました。

絶対口に出さずに心の中に秘めて、決意をしていたので、たぶん川口さんにもそこまでは言わなかった。

川口　そういう時代でしたね。私が大学に入った頃、もちろん入学は自分の心の中ではうれしいことなのですが、ある時バスに乗っていると、目の前に座った中年の女性二人の会話が、知人の娘さんが大学に入ったことを「嫁のもらい手がなくなる」と心配している内容でした。

下村　私も、四年制大学に行くくらいで反対された時代に、ましてアメリカ留学なんて、もう絶対結婚不可能、青い目のお婿さんでも連れて来たら大変だ、と。今では考えられない

ような時代でしたね。

川口さんは私より1年早くアメリカ留学から日本に帰ってきて、当時の通産省に入省なさいました。国家公務員試験を受けて、成績は2番で合格しました。いかに彼女が優秀か、日本の中では本当に異例の女性です。

川口　そういう時もあった、という・・・。

下村　外務大臣に偶然になったわけではなく、それだけの能力を持った女性だ、ということです。川口さんが公務員としてすばらしい活躍をしている間に、私は、ジャーナリストという言葉もない時代でしたが、大学院を出て、一貫して活字周辺の仕事がしたいという思いがありました。しかし当時、新聞社も出版社も一流の会社でさえ「女はいらない」と、履歴書さえ預かってくれない時代でした。男の人と同じ大学を出て、同じ勉強をして（私の場合は経済学部でしたが）、私も2番とはいいませんが、いい成績で卒業して、男だったら文句なく、黙って一流企業に入れるはずでした。少なくとも試験ぐらい受けさせてくれたっていいと思うけれど、それさえ叶わなかった。それが、私のアメリカ留学のきっかけでしたね。つまり女は男並みではいけない、プラスαの武器、男の人さえ持っていない武器を持たないことにはスタートラインにも立たせてもらえない、ということがわかって、それで、英語という武器を持つことによって少しはプラスになるんじゃないかと思ったのです。

朝日新聞には、最終的にはアルバイトでやっと入って、その後何年か経て正社員になって、結果的には「朝日ジャーナル」の編集長になりました。その間、川口さんは高級官僚、私は官僚批判をするようなサイドのジャーナリストでしたが、そのような立場には関係なく、時間があるときは度々会って食事をし、お互い生き方や仕事の悩みなど話し合う親友として今日までずっと友情が続いています。

川口　そう。いつも下村さんは、禅をずっとやっていらっしゃる影響だと思うのですが、とても大きく物事を考える。私はそこにもの凄く惹かれることがあり、私の場合、思考が箱の中に入ってしまうことがあるのですが、そんな時に話をすると、違う世界の刺激があって、思考が発展したり考えがまとまったりすることがありました。

下村　川口さんの二人のお子さんの子育ての話も、いろいろ聞いてきました。3人ぐらいのベビーシッターを、一日を時間で区切って時間交代で雇い、川口さんの給料はほとんど100%、場合によっては120%くらいそれに投入していました。彼女は子育てというのはある時期のみのことで、未来永劫かかるわけではないし、子育てにいろいろお金をかけることは自分の人生に対する投資みたいなものだ、とおっしゃっていました。仕事を辞めれば、川口さんのキャリアはそこで終わってしまったわけですが、仕事と家庭の両立を継続するために大変な苦労をされました。私も新聞社で女性差別を感じながらそれなりの苦労をして、その延長線上に今があり、無我夢中で歩いてきたけれど、私たちはやはり日本の戦後の女性史を歩いてきたのかなと思っています。

〔女性の政治参加〕

下村　戦後憲法が制定され、女性は参政権を手にし、女性議員が急激に増えましたが、戦後最初の女性国会議員が39人。そのあとはむしろ低迷していました。戦後60年以上経ってようやく、昨年8月の多数の小泉チルドレンが生まれた大選挙で、初めて女性国会議員の数は39人を超えました。しかし、数だけの問題でいいのか。川口さんにお聞きしたいのは、川口さんは官僚としての長いキャリアの後、サントリーという民間企業で7年間くらい常務を経験なさり、それから閣僚として環境大臣と外務大臣を経験して、今参議院議員でいらっしゃいます。女性が政治に参加することの意味、つまり、女性政治家というものは、男性と変わらないのか、それともやはり女性の政治家がある程度数が増えることに意味があるのか、そのへんのところを内側からどういう風に考えていますか。

川口　私はもっと増えて欲しいと思っています。それは、男性と女性は経験も違うし視点も違う。私は、違う意見が党の中で、あるいは国会の中で議論されなければ物事の半分しか政策に反映されないと思います。スウェーデン、ノルウェーでは国会議員の半分は女性です。少子化対策、仕事と生活のバランス、短時間正社員制などは、より女性の方がそのニーズを感じているわけです。そこは女性が大きな声を出していかなければいけないところだと思いますし、そういう意味ではもっと女性議員が増えた方がいい。

以前の私は政策には関心がありましたが、政治は自分とは無関係の遠い世界で無関係の人がやっている、という感じがしていました。関心があってもそれをどうやって実現していくかというところは、あれはどろどろした世界じゃないかしら、と思ってそこに踏み込むつもりがなかった。しかし、一度入ってみると今度は政治が実際どうやって動いていくかというところに関心を持たない人が大勢いる、そのことが逆に気になりますね。女性がそのプロセスに参加することによって、政治に対するイメージも変わっていくのではないかと思っています。

下村　それは、いわゆる国会議員のみならず、地方議会議員でも同様に考えるべきですか?

川口　全部のレベルでそうだと思います。身近なレベルであればあるほど増えた方がいいと思いますね。もっと政治に単に関心を持つだけでなくその次のステップは自分がやる、ということだと思います。

下村　そうですね。政治というものを自分の国の自分の問題として真剣に考えないことには、この国は良くならないと思います。確かに地方から見ると中央の政治は遠く見える場合もあるかもしれません。それならば一番身近な地域の選挙にもっと関心を持って候補者一人ひとりを厳しくチェックし、その方たちに関する情報を収集して選んで欲しい。そして、次のステップは川口さんが言われるように、ダメもとで自分が立つか、あるいはこの人と思う人を担いでやってみることが大事です。

〔若い世代の女性達へ〕

下村　川口さんは、特に外務大臣として世界中の元首や外務大臣など、ほとんど世界中のトップとお会いになっていると聞いておりますが、そういう中で、世界第2の経済大国と言われている日本の女性の社会進出度という点からはどうでしょう。

川口　2005年くらいの国連の統計で、寿命、教育レベル、一人当たりの所得で計る人間開発度という統計があるのですが、それは人間がどれぐらい豊かな生活ができているかという指標で、日本は11位です。ところが、女性の政治、経済の参加度という指標があり、私の見た統計では日本は43位でした。ヨーロッパやアメリカ、カナダは日本の上にいるのはもちろんとして、アジアの国でも日本よりも順位が上の国がたくさんあります。

下村　そうですね、小さな、私たちから見るとね、途上国と思われるような国ですが。

川口　世界に女性の外務大臣の会というのがあるのですが、自分が出席した当時は20カ国くらいありました。今はアメリカ、イギリス、イスラエルも外務大臣は女性です。バングラデシュ、パキスタン、スリランカ、インドなど、アジアの国でも首相や大統領が女性の国は増えています。

下村　今、たくさん優秀な女性がいますが、あるところまでくるとそれから先に、伸びないということがありますね。

川口　いろいろなことが理由にあると思いますが、一つは私自身についてあてはまることですが、真面目すぎてストレートすぎてというところがあると思います。回り道をする懐の広さ、余裕がない。それからもう一つはネットワークでしょうか。

下村　女性は、家庭を持ったり子育てをしたりするところで足踏みするというところもあると思いますが、遊びの精神だったりちょっと横道にそれたりというような部分、人を泳がせるようなところが少ない。一匹狼でやっていくことはできても、人を大勢束ねていくことが苦手な人が多い。それは能力がない訳ではなく、経験だと思うのですが。

川口　女性は、自信のなさというのがあると思います。自分で世界を小さく作っていて、本当はまわりから見ればもっと能力があるのに、自信がない。これは男女で分けて言うわけではありませんが、男性の中にはまわりが見てこの人どうかしらと思っても本人は自信満々。だけど結果的に、そうやって自信満々で自分でチャンスをものにして、やっている間に成功する人もいます。家庭でも社会生活でも女性が一歩引いてまわりの緩衝剤になるようなそういう生き方がいいとされてきて、まわりもそれを期待し、子どもの時からそう育てられてきているというところもあるのでしょうね。

【参加者の質問から】

会場　**下村館長は精神的な支えを禅に求め、禅を通して自己を見つめて、物事を判断なさるとのことですが、川口さんの精神的な支えは何でしょうか?**

川口　私は、自分が社会のためにどれくらいお役に立てるかを考え方の根っこに置いています。それは今までたくさんの方に恩恵をいただいて、機会をいただいていろいろなことをやらせてもらったので、それを少しでもお返ししたい。それが、私が今物事を考えるときの基準です。

下村　自分にとっての禅は、心を平静に保ち、正しい判断をするための心の鍛錬、トレーニングです。それを突き詰めていくと、結果的には私も川口さんと同じで、幸せとは何かというと、自分のためでなく利他ということになってくるのです。毎日自分の心を波立たせないで、できるだけ平静にすると、判断も狂わない。身体も柔軟体操を毎日やっていないと硬くなるように、心も体操をしていないと硬くなってしまう、それだけのことです。

会場　**年を取っていくと自分の生きてきた時代の教育から、男女についての考え方も自分の中で容易に変えられません。それもある意味自分らしく生きていると言えるのでしょうか?**

川口　自分らしく、地のままで行くのが一番良いと、そう私も思います。

下村　自然体が一番いいのですが、しかし、別に反対する訳ではありませんが、人間の生き方、命とは、生きるとは何かというテーマで私が編著者になってまとめた「ありがとう、おかげさま」という本の中で、遺伝子学者の村上和雄さんが書いていることをご紹介します。人間の細胞はどんどん老化し、新しい細胞は生まれないとみんな思っているかも知れませんが、そうではありません。人間は死ぬまでどんどん新しい細胞が生まれます。そして生まれてから死ぬまでの間にDNA、つまり能力の3%くらいしか使わない人がほとんどで、後の97%は眠ったままで死んでいくらしいのです。実はほとんどの人が自分の本来持って生まれたものを開花させないで死んでいくのです。このことは、努力をすれば死ぬまで人間は成長し続ける、問題は遺伝子のスイッチをどうやってオンにするかということです。オンにするきっかけは、刺激や感動、誰かとの出会い、時には失敗したりすることなのです。

川口さんの言葉のように、どうすればほかの方々のお役に立てるかという生き方をいくつになっても追求していただくことが、結局、自分にとって一番幸せなことなんだと思います。喜びは、お金でもなければ地位、名誉でもなく、人の役に立っているという実感をもてたときです。そしてその実感が、また、まわりの人たちや自分を幸せにする活動の原動力になるのです。男女共同参画のために活動するというのは、福島県、そして日本をよりすばらしい国にすることにつながると思います。本日は、どうもありがとうございました。

平成18年度「教師のためのヒューマンライツセミナー」
～学校から進めよう!男女共同参画～

人権（=「ヒューマンライツ」）の尊重は、男女共同参画社会を形成する上で最も基本となる理念です。児童・生徒にとって、人権意識を育む場は「学校」であり、「教師」は手本として自身が人権と男女共同参画への正しい認識を持ち、実践する姿を児童・生徒に示すことが必要です。

そこで今年度より、福島県教育委員会の共催をいただき、教師対象の「人権」をテーマとした講座を実施しました。

各小・中・高、養護学校の教職員　　実施日時／平成18年8月4日（金）9:30～16:00
参 加 者／小、中、高、盲・聾・養護学校　教職員　40名

福島県人権男女共生グループ 参事
渡辺典雄さん

福島大学 人間発達学類 教員養成実地指導講師
（元 県立橘高等学校 教諭）
角田勝重さん

平成17年度 県指定公開授業者
梁川小学校　教諭
石幡良子さん

県発行副読本「Be yourself」編集委員
県立橘高等学校　教諭
宮本英雄さん

○講義「男女共同参画社会の推進のために」
講師／福島県人権男女共生グループ 参事　渡辺典雄さん

男女共同参画社会基本法や県の条例等の解説、県としての取り組みについてのお話しがありました。

○講演「教えるは学ぶこと、学ぶことは変わること～男女共同参画（ジェンダー平等）を学ぶ～」
講師／福島大学 人間発達学類 教員養成実地指導講師（元 県立橘高等学校 教諭）　角田勝重さん

高校教員時代にジェンダー平等教育に取り組むこととなった経緯や授業を通して生徒たちに、「まず、女性が変わる」そして「男性を変える」ことを指導したことなどをわかりやすく、楽しくお話し下さいました。また、自身が深く関わった橘高校の「ジェンダー平等教育指針」「ジェンダー平等教育推進の概要」についても触れ、教師がしっかり学ぶことの大切さを話されました。

○事例発表「ジェンダーにとらわれない男女平等教育の視点を持った指導実践」
講師／平成17年度 県指定公開授業者　梁川小学校　教諭　石幡良子さん

6年生家庭科の授業で「家事の分担」をテーマに家庭生活を見直すことを通して、また、自分の夫の思いを吹き込んだテープをクラスで聞くなどのユニークな手法で児童が男女共同参画について考えるきっかけ作りになった事例をお話しいただきました。

講師／県発行副読本「Be yourself」編集委員 県立橘高等学校　教諭　宮本英雄さん

前任校梁川高校での総合的な学習の時間「男らしさ、女らしさって…?」で、クイズを用いてジェンダーについての理解を深め、さらに、日常生活におけるジェンダーを振り返るワークシートを活用して、グループ討議を行った事例をお話しいただきました。

○分科会「職員室で・教室で」
第1分科会／小学校・盲・聾・養護学校小学部
第2分科会／中学・高校・盲・聾・養護学校高等部

男女混合名簿、男女同室着替え等、自分たちの学校の現状と課題についてや教職員のジェンダーに対しての意識についてなど、活発な情報交換がありました。

そして、教職員がもっとジェンダーに敏感な視点を持って子どもたちに接していく必要性があることを確認しました。

第1分科会

第2分科会

第6回 未来館フェスティバル

9月2日（土）、9月3日（日）

「未来館大参画祭」をテーマに、9月2日・3日の2日間、盛大に行われ、のべ4,000人もの方々にご来館いただきました。

今回のフェスティバルは、「未来館」への親近感をもっと感じていただくために、にぎわいと華やかさを演出しました。同時に、男女共同参画に関する活動を積極的に行っている方々の「成果発表の場」としました。

◀今年のテーマは**「未来館大参画祭」**。大きな垂れ幕でご来館の皆様をお出迎え。

▼グランドオープンを盛り上げた「剣舞・二本松少年隊」
市婦連の有志のみなさんが、二本松少年隊の悲劇を情感豊かに演じてくださいました。

▲今や未来館フェスティバルには欠かせない**「さをり織り」**の装飾アート。場を華やかに演出してくれました。

▲グランドオープを盛り上げた「一太鼓（いずだいこ）」
川俣町通所授産所「恵」のみなさんの力強い、そして心温まる演奏でした。

▲都道府県の女性センター等で発行されている情報誌の中から、企画、内容、装飾に特に優れたものを選び展示しました。わが未来館NEWSも負けていられません。

▼シンポルイベント「プレイバックシアター」
即興劇なのに、来場者の話から、その時の様子だけでなく、心まで表現してしまう驚きの劇でした。

▲昔懐かし「紙しばいや」さん
子どもから大人まで、あっという間の人だかり。大人にはノスタルジックな、子どもたちには新鮮な、昭和の雰囲気。大好評でした。

▲小学生以下の子どもたちにも、未来館に親しんでもらうために、**「クイズラリー」**を行いました。館内を巡ってクイズに答え、すてきな賞品をゲットし、みんな大喜び!

県民参加企画

▶県婦人団体連合会と安達地方行政組合による**「環境展」**。身近な環境問題である「ゴミ問題」について、来館者に考えてもらう展示でした。

県民参加企画

▲**磐青の会のみなさんによる**
ー「ピースボート」に乗ってー
地球の様々な問題を学習しながら、世界一周をした体験発表でした。

▼安達地方行政組合のみなさんによる「わたあめ」の無料プレゼント。子どもたちに大人気でした。

県民参加企画

県民参加企画

◀ふくしま女性フォーラムが行った市町村議員による、各市町村の男女共同参画に関する成果と課題についての討論会でした。活発な意見が交換されていました。

県民参加企画

▲当センターボランティアの方々の有志で組織している**「宙（そら）の会」**。紙芝居や工作など、遊びを通して、男女共同参画を学んでいただく企画でした。

県民参加企画

▲**二本松市婦連によるチャリティバザー**
会員のみなさんが持ち寄ったものを社会福祉に役立ててもらおうという企画でした。

▲▶**未来館フェスティバル名物「大盤振る舞い!」**
今年は、1日目:男女共同「さんかく」おにぎり、2日目:納涼そうめん。その上、二本松特産きゅうり漬けもあり、行列ができました。

▲▶**「ふれあい動物園」**は、子どもたちに大人気。動物たちとのふれあいを通して、「いのち」の大切さを学んでくれるといいですね。

このほかにも、様々な団体が
盛りだくさんの企画を行ってくださいました。

「下村満子と語る会」in会津若松市 「あなたが元気!わたしも元気!」

平成18年7月22日(土)午後5時30分～7時30分
場所:ホテルニューパレス「しゃくなげ」
共催:会津若松市

当センターの下村満子館長が県内各地に出向いて、県民の皆さんと熱く語り合う「トークサロン」、今回は2度目となる会津若松市で行いました。

会場では会津若松市内外から駆けつけた参加者の皆さんとおいしいコーヒーとケーキをいただきながらリラックスした雰囲気の中、子育てや働き方などを始め様々なテーマでのトークが繰り広げられ、実に濃い2時間を過ごしました!

参加者の皆さんからは、「目からウロコでした」「幅広い話題で大変おもしろかった」「今後の人生に力が湧いてきました」「男女共同参画社会についてもっと勉強したくなった」「あっという間の2時間。視点が変わりました」など大変うれしい声をいただき、おかげさまで今回も大成功のうちに終了することができました。

男女共同参画社会へ向けて

副館長　後藤勝雄

手元に一枚の絵がある。右端に幼子、中央に手を伸ばして果実をもぎ取る人物、左側に老婆を描いたこの絵は、「生」のサイクルを表したものと言われている。ポール・ゴーガンはこの絵に一人の哲学者が一生かかって考えるような題名をつけている。「われわれはどこから来たのか。われわれは何者か。われわれはどこへ行くのか。」(※右上の絵画)私がこの絵に惹かれるのは、絵の素晴しさもさりながらその題名によるところも大きい。多くの人がそうであるように、私もまた若いときに人間とはなにかについて考え、書物を読みあさったことがある。未だ答えを出せずにいるが、その問いかけは問題意識として心の奥底にいつもある。

男女共同参画社会について考える場合、その根底にあるのは「人間とは何か。如何に生きるべきか。」という問題だと思う。福島県男女共生センターでは、男女の性別に関わらず先ず「人間」であることを基本としている。そして一人の人間として視野を広げ、意識を変革し、「人間力」を高めることを目指している。人は誰しも、男であれ女であれ、あるいは高齢者であれ心や身体に障害を持った人であれ、自由に生きて持てる能力を存分に発揮したいと願っている。もしそれを妨げるものがあれば―それは制度であったり、人の意識であったりするが―それらを変革して行く。当センターはそのための実践的拠点として位置づけられている。

最近、バックラッシュが目立っている。このことはある意味で、男女共同参画に関する運動が社会的な力を持ちつつあることの証左でもある。と同時に歴史的・社会的に形成された人の意識は容易には変わらないことを示している。歴史は直線的には進まないし、当然ゆり戻しもある。一つの思想が時代の潮流となり、社会を動かす力となるまでには長い年月を必要とする。

本県ゆかりの作家埴谷雄高は獄中でカントの純粋理性批判を読み、「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」というほど魂が震撼されたという。私もそれを追体験すべくカントに挑戦したことがある。結果は魂の震撼どころか満足に理解できない有様であった。私たち凡人にはそのようなことはめったに起きることではないし、またキリスト教徒を迫害していたパウロが神の光に打たれて回心し、最大の伝道者となったような奇跡を期待するわけにもいかない。大切なことは意識の変革を促す多様な活動を持続させることだ。6年目を迎えた当センターでは男女共同参画についての理解を深め、意識の変革を促そうと、ローカル、ナショナル、インターナショナルの三つの視点に立って事業を展開している。これらの取り組みが「魂の震撼」とまではいかなくても、男女共同参画社会について考える契機となることを願っている。

常陸宮ご夫妻 センターご来館

去る10月8日(日)、日本青年会議所全国会員大会郡山大会出席のために、福島県を訪れていた常陸宮ご夫妻が、当センターにご来館になりました。

はじめに、下村館長が、男女共同参画社会を推進するための共生センターの取り組みを紹介し、その後、館内をご案内しました。

館内では、介護実習講座や福島県女性団体連絡協議会の記念誌編集作業を見学されました。また、センターがボランティアの協力を得て毎月開催している、絵本の読み聞かせもご覧になられました。この事業は、日頃育児で忙しい親御さんに、本を読んだり選んだりする時間を過ごしていただけるよう、図書室を利用していただく間、子どもさんをお預かりするというものです。

ご夫妻は、それぞれの会場で参加者に気さくに声を掛けられ、センターで活動する県民と交流されました。

声を掛けられた参加者は、緊張したり、感激したり。

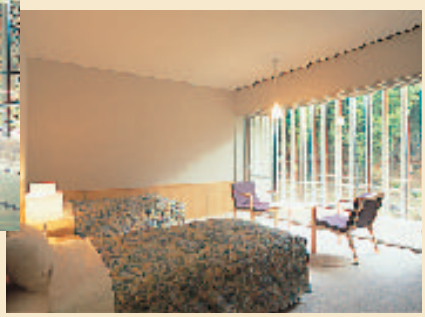
センターからのお知らせ

宿泊割引が始まりました!

当センターの宿泊室は宿泊研修の方だけでなく、どなたでもご利用いただけます。(宿泊室は休館日とその前日はご利用いただけません。)

未来館に宿泊された方にはスタンプカードをお渡しいたします。宿泊する毎にスタンプを1個押印いたします。スタンプが「5個」になりますと、次回は半額でお泊まりいただけます(通常4,200円または3,800円のところ2,100円または1,900円)。ぜひ、ご利用ください。

宿泊室(和室)



宿泊室(洋室)

企業リポート

平成18年度均等推進企業表彰における都道府県労働局長賞を受賞されたソニーエナジー・デバイス㈱の取り組みについてご紹介します。

※均等推進企業表彰・・・厚生労働省が、女性労働者の能力発揮を促進するための積極的取組（ポジティブ・アクション）を推進している企業を対象に平成11年から実施している。

お話を伺った方　管理部門総務部福島人事課シニアマネージャー　斎藤　弘氏
管理部門総務部福島人事課　高橋　桂氏

ソニーエナジー・デバイス(株)では従来より諸制度、職場環境を整備し、性別にとらわれない人事考課、セクシュアルハラスメントの防止や公平な教育の機会の付与等についても取り組んでいます。

［仕事と子育ての両立支援］

子の看護のための休暇（1子につき年度内12日間取得可能）、配偶者出産休暇等（2日間取得可能）の新設、育児休職期間の延長、また、フレックス制、育児短時間勤務制度等仕事と家庭を両立しやすい制度がとられています。

育児休職を取得している社員は常時20名程度おり、出産した社員の育児休職取得率、育児休暇取得者の復職率はほぼ100%となっています。

休職中の職員へのサポートとして、社内報とは別に産休、育休者向けリーフレットを平成17年10月より月1回発行しています。

［よりよい人材の獲得と育成］

採用面では、面接時の質問内容等を男女雇用機会均等の観点から見直したマニュアルを作成し、面接担当者に対して研修を行っています。

女性の応募者に配慮した対応として、活躍する女性社員をホームページで紹介し、また、就職説明会、社内見学会等の場で女性社員を担当にするなどしています。結果として理系女子学生のエンジニア部門への応募、採用が年々増加し、優秀な人材の確保につながっています。

製造部門における女性社員の育成に取り組み、生産革新活動のリーダーに認定された女性社員37名（6月現在）が活躍しています。また、各種社内講習会の講師として積極的に多くの女性社員が起用されています。

能力開発支援として、性別に関わりなく意欲のある社員には、その研修、通信教育等にかかる費用の50%～100%を会社が負担する制度が設けられています。

［女性の視点を取り入れた職場環境の整備］

セクシュアルハラスメント防止の取り組みとして、選任相談員とその相談窓口を二つの事業所に設置しています。

また、職場代表委員のメンバーに積極的に女性を起用することで、女性の視点を取り入れた職場環境の改善が進められています。

［次のステップは、生きた制度としての運用］

今回の表彰について、お話を伺った斎藤シニアマネージャーは「会社としては、もともと女性社員に限定したものでなく、『性別に関わりなく意欲ある社員がその個性を生かしながら能力を発揮することができる会社に』との考えから取り組んできたものが認められたものと受け止めています。次のステップとしては、整備された諸制度を生きた制度として運用していくために、社内広報や研修の場を通して、社員一人ひとりがそれぞれ意識をより高めていけるような継続的取り組みを進め、また、今後も制度を利用しやすい社内環境の充実に努めていきたい。」とのことでした。

会社データ

- 資 本 金／22億円
- 従業員数／約1,900名（うち女性約570名）
- 本社住所／郡山市日和田町高倉字下杉下1番地の1
- 事業内容／リチウムイオン二次電池、リチウムイオン・ポリマー二次電池、リチウムコイン電池等各種電池、テレビ、CRTディスプレイ、各種光ディスク、電源、バッテリーチャージャーの設計・製造
- 平成16年7月にソニー福島（株）とソニー栃木（株）との合併により設立。本社・郡山事業所のほか、本宮町、栃木県下野市、鹿沼市に事業所がある。（平成18年6月現在）

未来館 News

2006.12 No.24

■編集・発行

「未来館NEWS」

㈶福島県青少年育成・男女共生推進機構
福島県男女共生センター～女と男の未来館～
〒964-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1
TEL（0243）23-8301㈹　FAX（0243）23-8312
ホームページアドレス　http://www.f-miraikan.or.jp
メールアドレス　mirai@f-miraikan.or.jp

所在地　二本松市郭内一丁目196-1
■JR東北本線　二本松駅より徒歩12分
■東北自動車道　二本松I.Cより車で5分

PRINTED WITH SOY INK　R100　この広報誌は、古紙配合率100%再生紙を使用し、環境にやさしい大豆インキを使用しています。